

●対談を終えて



立教大学
経営学部 教授
高岡 美佳

印象的だったのは、清野智社長が2020年、2030年を見据える中長期視点に立って、経営構想を立てられている点です。先頃イタリアで開かれたラクイラ・サミットでは、2050年のCO₂長期削減目標が議論されましたし、今年12月にデンマークで開催されるCOP15では、2020年のCO₂中期削減目標が主要な議題となります。このことからわかるように、地球環境問題に真剣に取り組むためには、中長期的展望をもつことが必要不可欠です。JR東日本グループの「グループ経営ビジョン2020 -挑む-」は、それに合致したものと言えます。

清野社長が、「これからは、より目的意識をもってCO₂排出量削減に取り組む」と言われた点も重要です。鉄道が自動車に比べて地球への環境負荷が少ないという既成の事実にあぐらをかくのではなく、鉄道部門それ自体においても、地球環境保全のために力を尽くすという意気込みを感じ取ることができました。

環境問題から離れますが、鉄道を使って遠隔地から観光客を呼び寄せ、地方の振興に資するというご意見も新鮮でした。地方経済の現状を考えると、地元の人口を増やす方策には限界があると思います。したがって、地域の経済再生には観光振興が不可欠であり、清野社長が話された五能線の事例には、説得力がありました。

JR東日本グループのCSR活動が今後どのような展開をするか、期待を込めて注目したいと思います。

●今後の展望



取締役
総合企画本部経営企画部長
一ノ瀬 俊郎

2008年度は、洞爺湖で環境サミットが開催されるなど、地球環境問題に対する関心が高まった年でした。また、2008年3月に発表した「グループ経営ビジョン2020 -挑む-」の初年度として、「地球環境問題に積極的かつ長期的に取り組む」ことに対して具体的なアクションをはじめた年となりました。

2008年度を達成年度とする環境目標については、日々の業務の中での着実な取り組みによりおおむね達成することができました。引き続き、鉄道事業のCO₂総排出量を2030年度までに1990年度比で50%削減するための取り組みや、2010年度を達成年度とする次なる環境目標の達成に向け、グループ一体となった環境経営をさらに推進していきます。

今回お届けする報告書は、Webと冊子の連携を前提に、情報の取捨選択を大胆に行い、ステークホルダーの皆さまによりご理解いただけるような紙面づくりを心がけました。まだまだ不足している点もありますが、皆さまの忌憚のないご意見をいただき、よりよいものとしていきたいと考えております。